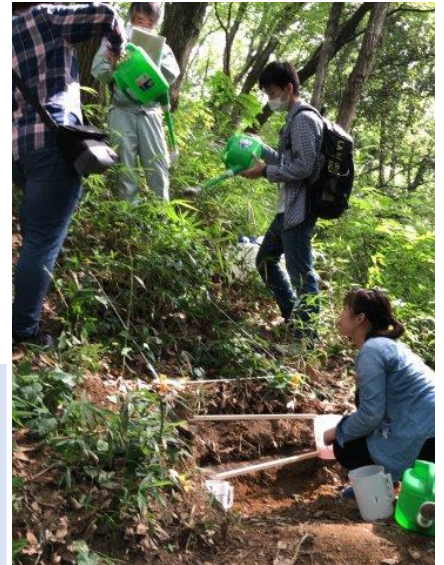


森と海のつながり体験講座 開催しました！

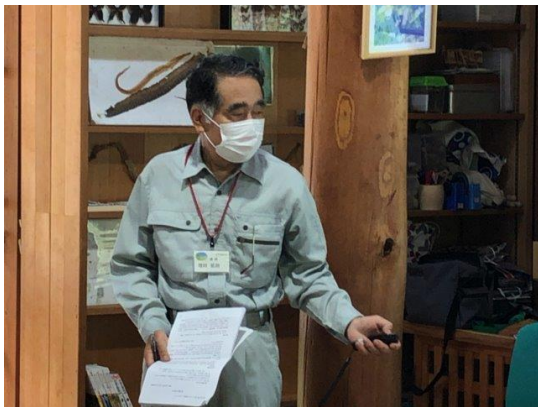


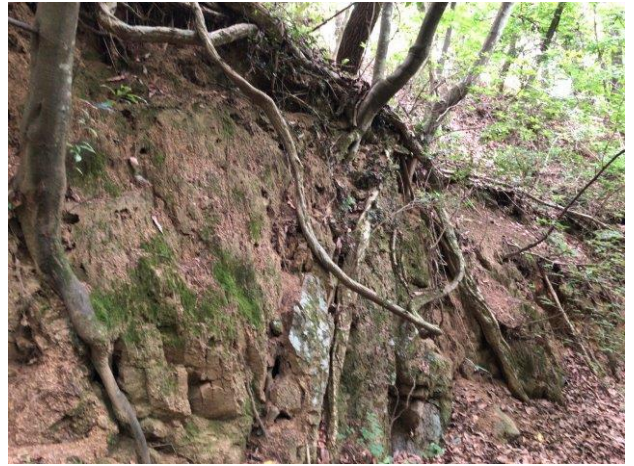
- 日時 令和2年6月27日（土）13：00～16：00
- 会場 ドングリランドビジターセンター（高松市西植田町）
- 講師 香川大学名誉教授 増田 拓朗 氏
香川県みどり整備課職員
- 共催 みどりの学校 ■協力 NPO法人どんぐりネットワーク

6月27日（土）に、ドングリランドビジターセンターにて、森と海のつながり体験講座を県のみどりの学校と共催で開催しました。初めに、講師の香川大学名誉教授 増田 拓朗 氏から「森と海のつながり」について解説していただきました。

最初に「魚つき林」の説明がありました。「魚つき林」とは、魚類を集めて、その繁殖・保護をはかる目的で設けられた海岸林のことで、江戸時代から各地で保護されてきたそうです。しかし、明治時代に入り、例えば別府湾で湾岸開発のために湾内にある小島の木々をむやみに伐採した結果、魚の通り道の変化が生じて漁獲量が大幅に減少してしまったそうです。他にも、明治以降の開拓で裸地化し、流出土砂が海水を汚濁し昆布や魚介類の水揚げが減少したために行われた「えりも岬」の緑化活動のお話もありました。続いて、「森林の持つ水土保全機能」について、具体的に水源かん養機能、土砂流出防止機能の観点から、目標に応じて適切な管理のされた森づくりが大事であるとお話がありました。

座学の後には、ドングリランド内の森林観察へと出発しました。





観察の前半は、ドングリランドのコロコロコースを進みます。どんぐりの「アベマキ」と「クヌギ」の木の違いの説明や、「クマザサ」の名前の由来は、歌舞伎役者の目の周りの「隈取り」と同じで、葉の縁に「隈取り」ができることによるもので、漢字では「隈笹」と書き、「熊笹」ではないと説明がありました。針葉樹と広葉樹の説明では、屋島の植生は1960年頃までは8割がマツだったが、今はマツはほとんどなくなっているなど、講師から解説があり、普段聞くことのできないお話に受講者は真剣に耳を傾けていました。また、「良い土壌」とは、植物の枯れ葉などの腐植（有機物が土壌中で、土壌生物や微生物の作用により徐々に分解してできた黒褐色のもの。）を多く含む土（肥沃な土）を言うそうです。さらに、土砂災害とも関連のある、雨風による浸蝕により木々がむき出しになった「のり面」についての説明もありました。



後半は、香川県みどり整備課職員から説明を受けながら、天然の「ライシメーター」の実験です。「森林の保水力」を体感してもらえよう、土壌の一面に雨の代わりに水をまきながら底面からの流出水量を測定しました。

斜面の一定範囲に、色を付けた水を散水し、“枯れ葉や植物の根の層”、“腐植を多く含む表土層”それぞれを通過して流出するまでに、どのくらい時間がかかるのか、どれくらい流出するのかを実験で確認しました。

森林観察を終え、ドングリランドビジターセンターへ戻り、講師への質問を行いました。受講者からは、「植林以外に保水力を高める手段はあるのか」、「天然ライシメーター実験の雨量が実際に降るとどうなるのか」などの質問があり、森林の働き的重要性と森を育むことへの関心の高さがうかがえる講座となりました。